

小沼さんを偲ぶ

佐藤節子

二月九日、午後八時三十一分、ルカ 小沼進一さんは昇天された。六十三歳。

十日午後、在宅していた私がたまたま電話器の前にいたとき、ファックスが送信されてきた。発信元法学会。何かしら、と訝しく思いながら見ていると、道案内の地図が出てきた。そこに「JR藤沢駅」の文字を見出したとき、私は、嗚呼小沼さんが亡くなった、と直感した。予期していたことかと問われれば、そのようなことはない。その証拠に私は、数年来乞われるままに自宅を開いていた研究会を二月十六日の午後にととうと、ご無沙汰のお詫びも兼ねて当の九日にメールを発信しているのである。その文面をいま開いてみると「早や二月も上旬が過ぎ、驚きます。人生は短いを否応なく実感します。悪い風邪など追い出してください」とある。後で調べたところそのメールは二三時五分着となつている。他方、では、小沼さんの死を全く予期していなかったかと訊かれると、頭の隅のどこかで何れこの日が来ることを考えていた、だからこそ送信されたファックスの最初の部分を見た瞬間に彼の死を直感したので

と言わなければならぬ。

前夜式までの間を、私は頭で理解する小沼さんの死と現実のそれとの間にある距離を埋めることができないまま、またご遺族のために何をして差し上げたらよいのかも分からず、落ち着きのない時間を過ごした。

十二日午後六時藤沢カトリック教会に着き、大きな円形の内部でモツァルトのレクイエムに包まれて厳然と存在している霊柩に目がいったとき、やはりこの出来事は現実なのだと実感した。広い会堂のなかで小沼さんは小さくみえた。それは神の前でいと小さきものとして生きてこられた人にふさわしい最後のお姿であった。

十三日正午から執り行われた告別式ミサの間、これまで四十年以上の長きにわたって小沼さんと交した会話の数々や様々な出来事を回想しながら、あの堪能なフランス語も、ギリシャ語も、ラテン語も一緒に逝ってしまうのかと惜しむ気持を抱いた。式後、ご遺体に献花して最後のお別れをしたとき、これで本当にお別れなんだという思いが私の体の中を突き抜けた。

青山学院大学法学部は一九五九年四月に発足した。初年度に一年次の入学生と同時に少数の二、三年生の編入学を認めた。小沼さんは青山学院大学の文学部英米文学科から二年次生として転部してこられた。発足当初、法学部の研究棟に予定されていた五号館は建築中で、新任教員は出講日には講師控室でたむろして過ごしていた。ある日講義を終えて講師控室でくつろいでいたところに、黒い詰め襟学生服に包まれた紅顔の青年がやって来て、先生に質問がありますと切り出された。法哲学担当教員として着任間もない私は、まだ先生という実感を持っておらず、またそう呼ばれることに慣れていなかったので一気に緊張してしまった。それが小沼さんと私との最初の出逢いだった。そのと

きの質問の内容は次のようなものでした。「法律学の目的は法律を必要としない社会をつくることだと考えます。それは医学の目的があらゆる病気を克服し、医学を不必要なものにすることと同じように考えられると思いますが」という趣旨でした。その考えに対する意見を突然求められて私はどぎまぎしながら一先ず「さあ、現実はなかなかそうはいきませんか」と答えた。当然このような返事で彼は満足するはずもなく、なおも食い下がってきた。私も少し気持ちを落ち着かせて、無法・無政府共和の樂園の実現を最終目標としたマルクスを引きあいに出しつつ、その時期はいつかくるでしょうか、とさらに同じような現実論を繰り返した。目的を問う者に現実の可能性で答える見当違いを私自身はよくわきまえていただけに、この一連の会話はずっと私の記憶に残っている。その後このテーマについて小沼さんと話したことはない。

三年になって小沼さんは私が担当した仏法書講読を履修された。その教材に私は大学院時代に文法書と辞書だけという強引さで途中まで読んでいたL・デュギーの『私法変遷論』を選んだ。彼は大学に入学すると同時にアテネ・フランセへ通い始めていたので、正規にフランス語を習ったことのない私は彼から発音や読み方を教わり、私はいえはこの書物のなかの諸概念の説明、基本的な着想を解説するという方法で、この科目は一对一で一年間進んだ。会話はしばしば仏法書以外のところへ脱線して行つた。脱線は宗教に及ぶことが多かった。小沼さんは当時無教会主義者として、毎日曜日、聖書を読み、祈り、また聖書の研究に精力を注いでおられたのでキリスト教についてよく議論した。アガペーと凡人の愛との違いはなにか、奇跡についてどう解釈するか、キェルケゴールの宗教観をどう考えるか（当時は実存哲学の隆盛期であった）などなど。科学と宗教や生と死の意味の哲学にも及んだ。一週間後に再度問題を蒸し返して議論を続けることもしばしばであった。

アテネ・フランセにおける小沼さんのフランス語の学習はその後も中断することなく続けられた。大学院時代にはそこにさらにラテン語まで加わった。私は当時ラテン語に挫折してじくじくしていたので、彼の学習をねたましく思ったことを記憶している。彼のこの継続の力はフランス政府給費留学生の試験に合格するという形で最初の実を結んだ。ゆつたりと研究しなかったのがグルノーブルの大学を希望していたが、試験の成績がよかったので、パリ大学へ回されてしまった、と合格の報告のとき彼は話してくださった。かくて一九六九年一〇月から二年半の研鑽の後 *La responsabilité civile au Japon-Evolution historique et fonction actuelle* の論文で一九七二年五月にパリ大学より法学博士の学位が授与された。これが彼の堪能なフランス語の第二の結実である。

一九七一年の夏、在外研究を終え帰途フランスに立寄った私は、そこで二日間小沼さんに市内観光におつきあい頂いた。小沼さんは以前よりも痩せて、疲れているように見受けられた。論文の重圧による疲労と思われた。「日本語だとこんなにすらすらと難しいことが話せるのね」と言いながら、二日間の多くを彼は目下の研究状況を、私は在外研究によって得たことを、お互い夢中になっておしゃべりした。そのとき小沼さんが話されたことで私の記憶に強く残っていることに、こちらに來た当初講義についていくのにやっぱり苦勞したといわれたことと、パリ大学での指導者 M・ヴィレー教授(法哲学)と A・タンク教授(民法)は西洋法を理解するにはスコラ哲学の源流にあるアリストテレスを知らなければならぬと口癖のように仰せだといふことの二つがある。両教授のこの言葉は彼のなかでずっと生き、醸成され続けた。お亡くなりになる二年二ヶ月前『アリストテレスの正義論—西欧民主制に活きる法理』が勁草書房から上梓され、彼の念願は果された。

帰国後、小沼さんはフランス法担当の教員として私たちに仲間入りされた。同時に留学中に得た生涯の伴侶モニッ

クさんとの生活が始まる。お二人のこの結びつきに言語は不用だったかも知れないが、その後の三十年のご生活が円滑に、順調に運んだのは彼の堪能なフランス語の力に負うところが大きい。そうだとすればそれがフランス語習得による第三の賜物といえよう。小沼さんからカトリックの洗礼を受けたというお知らせを頂いたのは十数年前のことであつたと記憶する。「モニックが一番喜んでくれました」という小沼さんの声が今も耳に残っている。

いつのころからか、小沼さん、最近元気がないなあと感じられてきた。顔色も冴えず、ときどき検査入院ときかさされた。そのとき二十年近く前にひとこと、少し肝臓が悪いのです、と漏らされたことがあつたのを思い出した。当時は医学の世界でも肝炎にC型があることは分かっておらず、肝臓病一般についても有効な策はなかったらしい。ときどき「いかがですか。お元気ですか」と伺うと「ええ元気です」と短く答えられた。それでも私が本当に?という顔つきをしているらしく、この通りとポーズをとって下さることもあつた。それでも、比較的最近、一度だけ、定期的入院を余儀なくされていると話され、その治療法を説明してくれたことがある。「今の治療法はすごいですね。その治療を受けると数値はピンと正常に戻るのですよ」と。そのとき彼の皮膚はすつきりしており、全体に精気を感じさせた。治療直後の希望に満ちたひとときであつたのだろう。しかしその治療の繰り返しには限界があるらしい。お亡くなりになってからご遺族に伺ったところでは、高校生のとき、激しい腹痛にもかかわらず頑固にご家族の忠告を斥けたために、虫垂炎治療に手遅れをきたし、輸血しなければならなかったそうだ。最近私の周りでもC型肝炎が原因で亡くなる方が幾人かおられる。その都度、四十年、五十年に亘ってウイルスと共に生き、ウイルスと戦い、ウイルスに破れる様を思い、極微のウイルスのしたたかさへ脅威を感じてしまうのである。

小沼さんがいつの間にギリシャ語を習得されたのか私は知らなかった。彼の著書のあとがきによれば学生時代アテ

ネ・フランセですでに学び始めていたようだ。お会いする度に、アリストテレスに早く着手しなければ、とか、アリストテレスの資料もその気になれば世界中から容易に入手できるので有り難い時代です、とか、アリストテレスに今ハマっちゃっているんです、とか、アリストテレスを始めてもう十年以上過ぎてしまつて、とか、あるときには見通しがついた歓びを、あるときは遅々として進まないもどかしさを吐露された。私が退職するころ、「やつとアリストテレスにまともりができましたのでこれでよいかアドヴァイス下さい。文部省の出版助成金を申請しようと思います。私、そのためには未発表が条件になるのでずっと温めてきました」と昂揚した面持ちで話された。それから定期的に私宅へ原稿を引つ提げての来訪がはじまつた。きちんと整理された原稿を宝物のように大事に鞆の中から取りだし、おもむろにテーブルの上に拡げられる姿は今も私の目に焼き付いている。もとより私はアリストテレスについて知るところは少ない。しかし素人にはおかめ八目という素人の利点がある。勝手なことを言つて楽しめる利点をおおいに堪能させて頂いた。小沼さんについて長年敬服してきたことがある。それは一言でいえば何事にもこの上なく厳密だということ。本来の意味の「適當」という言葉はあつても、日常語の「テキトー」という言葉は彼の辞書にはないらしい。彼の手書きに走り書きはない。誤字脱字にもお目にかかったことはない。常に正確さ、緻密さ、用意周到を旨としておられる。彼はいつもアリストテレスに言及した書物についてそのいい加減さが我慢ならないといった口吻で語られた。間違つた記述や訳語が引用され、それがまた孫引きされ、間違いが拡大再生産されていくことをアリストテレスのために、また学会のために非常に歯がゆく残念に思つておられ、実際に慨嘆の言葉を激しく吐露された。少なくともアリストテレスのこの部分についてだけは自分が第一級の仕事をしておかねば、という意気込みと焦りがそこに感じられた。そういう思いで長年の宿痾と戦いながら取り組んだ書物が完成をみたときの小沼さんの安堵と歓び

はいかばかりであったろうか。私には「ほんとうーによかったですねえ」という心からの搾り出す言葉以外に適切な言葉はなかった。この体力で最後まで漕ぎ着けるかという思いがちらつちらつと私の頭をよぎっていたからである。

ご葬儀の後、ご自宅に伺ったときご遺族の方は、『建物区分所有権の法理』（一九九二年、法律文化社）の場合にもそうでしたが、アリストテレスに取りかかっているときには、この辺り一面に資料を拡げてその間を這いずり回りながら書いていました、でもそのときはいつも生き生きしていました、と書斎のフロアに目を落として仰せであった。

アリストテレスの原稿が完成した年の夏、パリでご長女の結婚式を済ませ、彼はアテネを訪れた。感慨一入であったようだ。「私の古典ギリシヤ語は今ではほとんど通じませんでした」と苦笑しておられた。

オランダの歴史学者ホイジンガは『中世の秋』の中でメモント・モリと言った。死を思えというラテン語である。死を忘れたところに生の意味や喜びを見出すことは難しい。二月九日、この世の最後の日、病室から去りたい思いのモニック夫人に早く帰宅するように彼は命じられたそうだ。一人で沈思し、一人で死を迎えたかったからであろう。藤沢まで帰り着いた彼女が胸騒ぎを覚えて病院に引き返されたときには小沼さんはずでに昇天されていたと後でお聞きした。彼は古武士のようでしたと評したある宗教者がおられたが、言い得て妙である。まことに哲学とは死のリハーサルかも知れない。リハーサルをしっかりとやっておけば本番に慌てないで済む。Requiem aeternam dona eis, Domine.

昇天された五ヶ月後の七月三日、小沼さんはおじい様になられた。おじい様によく似た女のお子様。名前はアマン

デイーンヌ、日本名は早苗ちゃん。

人は生まれて死ぬ。その一生は空しく消え去るように見えるが、そうではない。ひとりの人の思想や信念、生き方すべては必ず誰かの脳裏に伝わり、その影は形となる。そして血もまたこうして受け継がれて行く。

(本学名誉教授)